

青い薔薇の咲く場所

鉛弾

バラの花が咲いた。

まるで空を映したような深い青。様々な花が植えてある花壇の中でも、そのバラは決して埋もれることのない存在感を放っている。花びらを伝う朝露が一滴、アクアマリンのごとく輝いた。

「よかった……きれい」

教会の中の小さな庭。暖かな日差しに包まれたその場所で、修道服を着た一人の少女が感嘆のため息をもらした。年齢は十一、二くらい。金色の小さな十字架を首からさげ、同じ色の長い髪は庭いじりのために後ろでまとめられている。

彼女は手に持っていた緑色のプラスチックジョウロを置き、髪をほどこきながら傍らの犬に尋ねた。

「ノインもそう思うでしょ？」

ノインと呼ばれたラブラドル・レトリバーは彼女の問いかけに首をかしげる。眠そうな目をさらに細め、関心がなさそうに大きな伸びをした。

「もう……」

友のそっけない反応に少女はがっくりと肩を落とした。一生懸命世話をしようやく咲かせた、たった一本のバラであるというのに。

彼女はノインの前にしゃがみ込み、その頬を軽く左右に引っ張った。まぬけな顔。少女は小さく笑う。

いい朝だった。

天を仰ぎ、遙か高みを漂う雲にフォーカスを合わせた。中庭から見える空はこれ以上ないくらい晴れていて、時折頬をなでいく風はほんのりと熱を帯びている。春の陽気の中に遠い夏が少しだけ見え隠れしていた。

少女はノインを連れ、洗濯物を干しに裏庭へ向かった。裏庭は洗い場を抜けた先にある。衣服の入った籠を持ち、ふと洗い場の壁に掛った鏡が視界に入った。鏡の中にある女の子はコバルトブルーの目を輝かせ、幸せをバケツ一杯捕まえたような表情をしている。もともと、それは今日に限ったことではない。

少女は鏡にウインクを一つ投げかけ、髪をなびかせながら教会の裏庭に出ていった。

「こらノイン、ジャマしないの」

少女は箒の先でノインをつつく。

午後のお祈りを済ませて昼食をとり、少女は客間の掃除をしていた。テーブルとイス、デスクに加えてベッドまであるこの小さな部屋は、ずいぶん長い間使われていない。

泊まる必要がない、それならばまだよい。しかしおかしなことに、そもそも教会に人がやってこないのだ。単なる偶然か。信仰が人々の心から離れてしまったのか。もしかしたら教会があることすら忘れてしまったのか。

まさか、とは思う。

いずれにしろ誰も来ないのは、少しだけ寂しかった。
床を掃く手が止まる。ノインが足元で小さく吠えた。

「……うん、ごめん。だいじょうぶだよ」

ノインの頭を軽くなでる。箒を壁に立て掛け、少女は家具を拭き始めた。テーブル、イス、デスク。ついでにデスクの中身も整理する。取っ手をつかんで戸棚を引き出し、テーブルの上に中身を出した。聖書、羽ペン、インクつぼ、洋服のボタン、判子、生糸、便箋、色褪せた用紙、懐中時計、錆びた鍵、ファイル――

――あれ？ これって……。

ファイル。ぶ厚いその間から一枚の写真が出てきた。白衣と眼鏡が印象的な男の隣に、ピースサインを出している小柄な女の子の姿がある。二人の後ろではたくさんの人が笑っていた。

「わ、懐かしい」

写真を手にとりまじまじと見た。ずいぶん前の、少女の誕生日会で撮ったスナップショットだった。

少女の視線が遠くなり、客間ではないどこか別の場所に移る。しかしそれもほんの一瞬で、すぐに彼女は掃除に戻った。写真を丁寧にファイルへとしまい、出した順に中身を戸棚に入れ直す。

壁に立てておいた箒をつかみ、

「よし、次は聖堂。行こ」

ノインに向かって明るく笑いかけた。



ヨーロッパ共和国と合衆国との間に起こった小競り合いは、瞬間に膨れ上がり世界に飛び火した。第三次世界大戦である。

共和国は核で燃え、合衆国も細菌にまみれた。最終的に世界の四分の三が灰になり、国というシステムは崩壊した。しかしそれでも人間は争いをやめなかった。武器をとり、破壊された環境から目をそらして、残された土地をめぐって諍いを繰り返した。

大戦で投入されていた機械兵器は、攻撃対象の国家が減んだ時点で標的を切り替えていた。ヒトに対する無差別攻撃が始まった時になって、人類はようやく現状を把握することになる。それは人間が互いに殺し合い、総人口が十四億を切った時のことだった。生き残った人々は細々とした集落をつくって、襲い来る機械に怯えながらこの薄汚れた地表に這いつくばっていた。

大戦から約半世紀たった今でも、それは続いている。

蒼蒼と茂った木々の隙間から、茜色に染まる空が微かに覗いた。
「まずいな」

男はつぶやく。鋭い目つきをした、青年から半歩出たくらいの兵士だった。ところどころ傷のあるケブラーポッドを被り、共和国製の迷彩服を身につけている。背にはバックパックを背負い、その足取りは重い。

見えない天を仰ぐ。

物資を求めて仲間とともにコロニーを発ったのが一昨日。欲を出して遠くまで来すぎたのが大きな間違いだった。襲撃を受けて

男の中隊は散り散りになり、挙句の果てに自分は道に迷ってしまった。

獣道と呼ぶのもためられる小道を抜け、藪を掻き分けると比較的開けた場所に出た。乾いた地面を探し、火をおこして野営の準備をする。バックパックから通信機を出して弄ってみるが何の反応も示さない。

——あいつら、逃げ切れただろうか。

ダメだろう、と思っている自分が無性に腹立たしかった。

見つめる焚火のゆらめきに昨日の光景が映る。爆炎。そこかしこで噴き上がる真紅。鋼鉄の足に踏み砕かれ、内臓をまき散らす兵士。おびたらしい死。そしてそれらの光景を冷淡に見つめる、コバルトブルーのカメラアイ。銃弾が、体液が飛び交う中を男は必死に走り抜けた。恐怖と憎しみを抱いて。

頭を振って悪夢のような現実を振り払う。彼は心を落ち着けようと、コロニーで待っている家族のことを思い浮かべた。家族といっても、そう呼べる人間は妹を残してすでにいないのだが。

「ジュネ……帰るからな」

男は無線機をしまつて野戦食を取り出し、携帯コンロで沸かしたお湯に放り込んだ。最後の食糧だった。

気配。

右斜め前方四十五度、小さな光点が微かに動いたような気がした。反射的に拳銃を抜き、背後の窪地に身を隠す。たった今日にしかモノを信じなくなかった。

コバルトブルー。

四脚型の大型自立兵器が一機、こちらに向かってきていた。

自立兵器。かつての大戦で猛威をふるった鋼の獣。男の目と鼻の先にいるのは対戦車兵器として運用されていたタイプで、人間が一人でどうこうできる相手ではなかった。

——なんで、くそっ……。

大昔のマンガには、優しい心を持った百万馬力のロボットがいたらしい。男の目と鼻の先にいるそれもプログラムによって一つだけ感情を持たされている。

ヒトが機械に対して抱いているのと同じそれを。

じっと耳をすませる。藪を押しよける耳障りな音が聞こえ、続いて何やら金属的な、カメラのシャッターに近い音。男は咄嗟に耳をふさぎ窪地にうずくまる。

銃撃。

襲い来る弾丸。高速の発射音がまるでチェーンソーのようにも聞こえる。冷えた空気が切り裂かれ、夕暮れの森が激しく震えた。

男は折った。神にはない。何に折っているのかは彼にもわからない。歯の根が合わず、発している言葉も定かではなかった。

短い金属音と同時に銃撃は止んだ。自立兵器は四秒足らずの掃射を終え、何事もなかったかのようにその巨体を反転させて、夕闇の向こうに去って行った。

辺りが完全に暗くなったころ、骸骨にも等しい無表情を張り付けて男は窪地から這い出てきた。広場の光景を見て絶句する。男の中には再び、機械に対する激しい憎悪が燃え上がった。

最後の夕食は直径二十センチの穴になっていた。

教会には食堂が存在する。かつては信者の集いに使用された、十分すぎるスペースを持つ場所である。厨房は大人が八人入ってなお余裕があるほどで、そこからカウンター越しに向こうを見るのと遠近感がおかしくなる。

「今日はポトフ。いいよね、ノイン」

少女は夕食の献立を決め、巨大な冷蔵庫から使う野菜と肉を取り出した。冷蔵庫の中にはいつでも新鮮な食品がいっぱいに入っている。自動供給システムによるものだが、少女は単に便利としか考えていなかった。

邪魔にならないよう長い髪を後ろで束ね、作業の前によく手を洗う。遠くからでは分からないが、彼女の右手首にはうっすらと何かの跡が浮き上がっている。腕時計の跡のような、見ようによつては何かの記号に見えなくもない。

中鍋をコンロにかける。手際よく材料を切り、肉をいため、昨日作っておいたスープを野菜と肉に加えて煮込む。その間ずっと、ノインは少女の足元でうろろしていた。

「おとなしくしてなさい。じやないとふんじやうよ」

味見をして出来上がりを確認する。彼女は自分とノインの分を盛り付け、テーブルの端にぼつんと座った。座るところはいくらでもある。だが彼女は決して中央には座らないことにしていた。誰もいない無数の空席が、何も置いてないテーブルの空間が、無

▽
▽
▽

言の圧力で自分を押し潰そうとしているように思えたからだ。傍らのノインが——たとえだらしないとも——ただただ心強い。「主よ。今日も我々に生きる糧を与えてくださったことに、感謝いたします。いただきます、アーメン」

スープの味に頬を緩ませながら頭の中で教会の見取り図を広げ、食べ終わったらどこに行こうかと思案する。掃除はすでに終えてあり、特に急いでやるような事も——

——あ。

図書館の整理。忘れかけていたそれが、頭の隅から転がり出てきた。掃除の最中にもかかわらず、彼女は面白い本を見つけて読み始めてしまう癖があった。それゆえいつまでたっても整理が終わらないのだが、本人にその自覚はない。

食べる手を止め、隣に尋ねる。

「食べ終わったら図書館に行こうか？」

ノインはしつぽを振りながら小さく吠えた。皿の中はニンジンを除いて、早くも空だった。

▼
▼
▼

朝靄にけむる森の中。

男に方向感覚などというものはやない。空腹に耐えながら歩き続けること、それ以外には何も考えられなかった。ただ唯一、背負ったバックバックの軽さが無性に悲しかった。

死。

立ち止まった途端、底なし沼のような恐怖に足をとられた。懸命に足を前に進める。ふとあの自立兵器はこうなることを見越していたのだろうか、などと思う。もしそうなら、ずいぶんと手の込んだ殺し方をしてくれる。餓死させるなど。

「……ロボットめ」

藪を抜けると唐突に森が終わり、朝露に濡れた背の低い草が生い茂る場所にてた。同時に彼にまとわりついていた霧が、身を切るような風で吹き飛ばされる。

町があった。

男の立っているところから町までは、四キロほどの下り斜面が続いていた。町の中央の高台には黒い壁に囲まれた巨大な教会が鎮座し、いくつもの尖塔が天を突いている。空には重々しい黒雲がうねっていた。

彼は急いで斜面を下っていった。近づくにつれてはつきりしてきたが、町といっても近代建築の集合住宅ではなく、中世風の石造りの家々が立ち並んでいる。すがる気持ちで入口の門をくぐり、きれいな石畳の大通りを進んでゆく。途中の広場には大きな木がそびえ、その周囲には錆びたベンチが置かれていた。灰色のフィリターを通してような、言い知れぬ寂寥感。

男は広場を抜けさらに通りを進む。立ち並ぶ家々に目立った損傷はない。それどころか少し掃除をすればそのまま住めるほどだ。しかし、

「……だれもいない」

どこにも人の姿は見当たらなかった。ためしに一軒の家に鍵を壊して入ってみる。庭、キッチン、バスルーム。やはり誰もいない。最後に二階に上がって寝室のドアを開けた。

「うっ——」

ベッドの上に横たわる白骨化した二つの死体。風化の具合から見て少なくとも数十年は経っていた。隣の部屋にもう一体、子供の死体があった。

男は壁にかかったカレンダーに目をやった。すでに酸化しきっており、文字の判別ができない。嫌な予感が頭をよぎる。男はキッチンに行つて食料庫を漁ったが、案の定なものもなかった。頼みの綱の自動供給システムは完全にダウンし、冷蔵庫だった物の中には八ミリほどの厚さで埃が積もっている。

おそらくこの町は攻撃を受けたのだ。細菌か、もしくはパルスボムかもしれない。この様子では彼らは自分の身に何が起きたのかわからぬまま、眠りながらあの世にいったのだろう。絶望感とともに、男はそう思った。

意識が朦朧としてくる。

彼は家を後にし、空腹と闘いながら通りを進む。どうしようもなく顔をあげると遠くに教会の尖塔が見えた。天国に一番近い、神の住まう家。屋根の隙間に見える十字架を睨みつける。

——神……んなもんいるかよ。

そう叫ぶ力はない。

次第に空気が湿気を運び、やがて霧のような雨が降ってきた。

男は雨の中を憑かれたように進む。いくつもの角を曲がり、徘徊

する兵器を避け、ネズミ一匹いない細い路地を抜けて、彼は町の中央にたどりついた。

教会の姿に息をのむ。豪華な装飾、いくつもの尖塔。それほどことなく巨大な長方形のケーキを彷彿とさせる。教会の周囲は厚い対核防壁に囲まれ、正面の大扉に続く大理石の階段はばかばかしいくらい幅を持って、ずっと上まで伸びていた。

彼はゆつくりと階段をのぼった。疲労と雨で焦点がぼけ、何度も段に躓いて転びそうになる。途中に一体の骸骨が倒れていた。

赤錆びた眼鏡をかけ、E E Cと縫い付けられたポロポロの白衣を羽織っている。自分ももうすぐこうなるのかと思うと、口元に訳のわからない笑みが浮かんできた。

雨は降り続ける。

ようやく上までたどり着き、扉を押し開いたところで彼の意識はブツリと途絶えた。自分の頭が絨毯の敷かれた床にぶち当たる音すらも聞こえなかった。

倒れた男の遙か頭上で、鐘が鳴った。

▽
▽
▽

目が覚めた。ベッドではなく絨毯の上であることに驚く。

「んあ、そうか……」

図書館で本の整理をしていて、本を読んでいたのはうっすらと覚えていた。そのまま床で眠ってしまったのだろう、と思う。

少女の体には白い毛布が掛けてあり、傍らにはノインが丸くな

っていた。毛布はノインが持ってきてくれたものだった。

「ありがと、ノイン」

かなり早い時間だった。立ち上がって窓から外を見ると、ミルク色の濃い霧がかかっている。体感気温は十一・一六度、雨が降りそうな気配もあった。

少女は少し早めに朝食を摂り、いつもと同じく掃除を行った。

ワインセラーと聖堂のステンドグラスの掃除を終えて掃除用具を裏庭の倉庫に置きに行く途中、鉛色の空から霧雨が降ってきた。

脚立を担いだまま空を見上げる。彼女は雨の匂いが好きだった。

一つ思いつく。

「ねえ、ノイン。鐘楼に行こ」

鐘楼は教会の真ん中に立っている塔である。他の尖塔と比べても抜きん出て高く、頂上には少女の背丈ほどの鐘が下がっている。

ぐるぐると螺旋階段を登る。石段にあたる靴の音は途切れることなく、一人と一匹は長い階段を休まず登り続けた。

最後の石段を上り、跳ね上げ式の戸をあける。

鐘楼の頂上、十二本の柱に囲まれた円い部屋。中央には鐘が吊られ、柱の隙間からは古いつくりの町が望める。雨のせいで視界はあまりよくないが、おぼろげに見える青みがかった町並は少しもの悲しく、そして美しかった。

「きれいだね、ノイン」

少女は備え付けの長椅子に座り、足元に寝そべる友の頭を軽くかいた。ノインは気持ちよさそうに目を瞑る。

雨は降り続ける。

彼女は立ち上がり、手すりにもたれて眼下に広がる町を見た。大通りにはきれいな石畳が敷かれ、広場には大きな木が立っている。あそこを歩いてみたい、と少しだけ思う。

しかしそれはできなかった。

『お前はここにいろ。俺が帰ってくるまで教会の中で待っているんだ。いいな、約束だ』

交わした約束。ゆびきりの感触をまだ覚えている。そしてそれはまだ果たされてない。いくつもの季節が過ぎ去り、五十二回目の春ももうすぐ終わる。

少女は目を瞑る。思い出すのは彼の姿。少しだらしく着こんだ白衣と、時折みせる優しい眼差し。

——もしかしたら、あの人はもう……。

胸に刺さる不安。首から下がった十字架を握りしめ、そんなはずはないと自分に強く言い聞かせる。

「約束したもの……」

冷たい雨は降り続ける。

「……そろそろ降りようか。お昼になっちゃう」

しばらくして彼女は口を開いた。教会の鐘は一日に三回鳴る。

その時鐘楼にいると大変なことになるとずいぶん前に知っていた。ノインは鼻を鳴らしてむくりと起き上がり、先に階段を下りて行く。彼女は雨の町を最後にもう一度振り返り、踵を返して地上に帰っていった。

鐘が鳴り響いた。

塔から降り、お昼は何にしようかとノインに話しかけながら、彼女は礼拝堂に続く扉を開けた。

跳び上がった。

入口の大扉。先ほどまで閉まっていたそれが開いている。風とともに雨が堂内に吹き込んでくる。そしてその手前には、男が一人倒れていた。



ジュネの音が聞こえたような気がした。食料探しの当番なのだから早く起きると、しきりに呼びかけてくる。いつの間にも自分は帰ってきたのだらうと思いつつベッドから起き上がった。

腹に穴が開いていた。

男の肋骨から下腹部にかけては大きく抉れ、そこから臓器がこぼれ出ている。嘔然とする彼の目の前には、ジュネではなくコバルトブルーのカメラアイ。声にならない叫びをあげた。

目を開ける。

ジュネでもカメラでもなく、見慣れぬ石造りの天井が視界に映った。周囲に音はなく男の息遣いが聞こえるのみ。

——夢、か……。

男は安堵した。少なくとも自分はまだ生きている。餓死しても

いなければ、ハチの巣にされてもいない。

唐突に腹部に激しい痛みが走った。腹を押さえながらベッドから体を起こし、先ほどの夢を思い出しながら恐る恐る毛布をめくる。幸い穴は開いておらず、痛みは正体は極度の空腹だった。

しかし男は、自分の纏っているものが下着であることに驚いた。迷彩服ではない。おまけに頭には湿ったガーゼが当ててあった。確かに少しこぶになっているような気がしないでもない。ぐるりと部屋を見渡す。

小さく簡素な、だが落ち着いた雰囲気の家だった。バックパックなど装備一式はベッドのすぐ隣に立て掛けてあり、修道服が畳んで枕元に置いてある。少し離れたテーブルの上にはパンとスープがのっていた。獲物を見つけた獣のごとく、男は迷わず食らいつく。スープがこぼれシャツに染みができる。咀嚼。

頬を伝って流れおちた涙がスープに小さな波紋をつくった。息つく間もなく食器を空にし、半ば放心した状態のまま置いてある修道服を着た。ふらりとドアに寄り、開ける。

男は夕暮れの庭に出た。片側吹き抜けの廊下に四角く囲まれた、短水路プールほどの庭。中心には噴水があり、周囲には色とりどりの花が咲き乱れている。その中に彼は青いバラを見つけた。

ブルーローズ。遺伝子組み換え技術によって生み出された人工の花。『奇跡』の花言葉をもつと、いつか隊の一人が語っていた。自生しないこの花が咲いているということは、ここには人がいるはずだった。

だんだんと意識が覚醒してくる。

彼は花壇に背を向け、近くの扉を少しだけ開けて中を覗いてみた。巨大な図書館だった。そびえ立つという表現がぴったり、遙か天井まで届くほどの本棚。それが無数に立ち並び、壁も端から端まで本で埋め尽くされている。この世の書物をすべて収めている、そう思えた。

扉を閉め、ここはどこかと思案しながらさらに廊下を突き進む。突き当りに威圧的な、一回り大きい扉があった。押し開く。

大聖堂。

そう呼ぶより他にない、圧倒的な広さの空間。掲げられた十字架に向かって頑なに沈黙を守っている、左右合わせて二百を超えるであろう長椅子の群れ。その間に敷かれた真紅の絨毯の上に、一人の少女と一匹の犬がいた。

修道服を着た少女は中央の壇の前に跪いて祈りを捧げている。

十字架の後ろ、ステンドグラスから差し込むオレンジ色の光の束が、少女の周囲に輝く輪を生み出していた。犬はそんな彼女の横に微動だにせず座っている。まるで彼女に仕えるナイトのように。男はただその場に立ち尽くす。祈りを終えた少女はそんな彼に気づき、犬とともに近づいてきた。

「よかった、起きられましたか」

頭のベールをとりながら彼女は続ける。あらわになった金色の髪が光を受けて波打った。

「意識がなかったので、勝手ながら客間まで運ばせていただきました。具合はどうですか？」

「あ、ああ……大丈夫だ、シスター」

彼は少女をまじまじと見つめた。年齢は十一、二歳くらい。身長は一五〇前後。簡素な修道服を纏い、首には小さな十字架が下がっている。武器は携帯していない。驚くほど整った顔立ちをしており、同じ人間とは思えなかった。ただ、彼女の纏っている雰囲気はどこなくジュネに、妹に似ているような気がした。

「ここは……教会なのか？」

記憶がもつれていた。町を見つめ、食料庫が空で、そのあとはおぼろげにしか思い出せない。倒れたということだけは額のこぶが証明していたが。

「ええ、そうですよ。礼拝をどうぞ」

少女はにこりと笑って答えた。やけに嬉しそうだった。

男はそれを断り、頭上に広がる聖堂の天井を眺めた。光をモチーフにした見たことのない宗教画が、楕円形の天井一面に描かれている。視線を降ろしてゆくと一本の柱に何かが書いてあった。

『復元教会・IX』

男の背後で少女が口を開いた。

「そろそろ夕食ですけど、食べていかれますか？ いえ、どうせなら泊っていただくさい。部屋は空いていますよ」

少女の言葉に耳を疑う。コロニーでそんなことは考えられなかった。物資を得るには危険を冒し、自らの力で手に入れなくてはならない。できない者から消えてゆく。それは男に、地上に住む人間にとって当たり前の掟だった。

彼女の言葉を鵜呑みにはできないと考えつつも、しかし男は頷く。空腹のためか、はたまた彼女の雰囲気そうさせたのか。

「えと、では案内しますよ。こっちです」

男は聖堂を出ていく少女に続いた。バラが咲いている中庭を右手に廊下を進み、一つの扉の前で止まる。

「少し中で待っていてくださいね。先に洗濯物を取りこんできますから。ノイン、行こうか」

そう言って彼女は突き当たりのドアに消えてゆく。男は扉を開け中に入り、手近な席に腰を下ろして食堂を見渡す。古いつくりに見せかけてはあるが、実際はそれほどでもないことに気がついた。大理石に見えるテーブルは強化セラミック製で、天井には音をたてずに空調ファンが回っている。厨房を覗くと自動供給システムが導入されていた。

じつと座っていると、例えようのない圧力が襲ってきた。男はそれから逃れるように椅子の数を数え始める。七十を超えたところでだんだんと面倒になってきたが、しかし続ける。ちょうど三百個目に差しかかったところで少女がドアを開けて帰って来た。

「お待ちせしました。洗った服は部屋に置いときましたから」

そう言って彼女は厨房に入って行った。あいにくと席からは様子が見えない。再び暇になった男は、傍に来た犬の頬を軽く左右に引く張った。まぬけな顔。男は小さく笑う。

夕日が窓から差し込み、食堂がオレンジ色に燃えた。

しばらく犬と遊んでいると、

「ほらノイン、どいてどいて」

そう言って彼女は盛り付けたシチューの皿を器用に三つ持ってきた。一つは男の前に、一つは床に、そして最後の一つを自分の

前に置いた。シチューからはあたたかな湯気が漂っている。

男はスプーンを持ったが、彼女にびしやりとたしなめられた。

「お祈りがまだですよ」

彼は隣の犬を見た。犬は行儀よく座ったまま、ちらりと男の方を向く。その視線に男は眉をひそめた。

「主よ。今日も我々に生きる糧を与えてくださったことに、感謝

いたします。いただきます、アーメン」

「……あーめん」

男はしぶしぶ祈りの言葉を唱えた。頭をあげると少女がじつとこちらの様子をうかがっている。やはりなぜか嬉しそうだった。

男は訝しみながらも、一口シチューを口に運んだ。

「どうですか？」

「ああ、うまいよ。……とてもうまい」

子供のころに家族と食べたシチューの味を思い出しながら、男は少女を見つめた。しかしあらためて近くで見ると、少女の容姿の非凡さがよくわかる。幼さを残した、女性になる一歩手前の顔立ち。じつと見ていると吸い込まれそうなコバルトブルーの目。カメラアイ。爆炎、赤、鋼鉄の足、そして死体。

「よかった。ノインは感想を言ってくれないから」

男は椅子を倒しかねない勢いで立ち上がった。

「どうしたんですか？」

「いや、悪い。——ちよっと部屋に忘れものをしてきた。取ってくるから、気にせず食べていてくれ」

そう言うや否や彼は食堂から出て行った。音をたててドアが閉

まり、その反動で少し開く。あとに残された少女は首をかしげ、ノインと顔を見合わせた。

廊下を歩く。だんだんとテンポが速くなる。駆け足。自分が寝かされていた部屋に飛び込むと同時にドアを閉め、男は大きく深呼吸をした。額に手をやりドアに寄りかかる。少女の目を見た瞬間、男の脳内には襲撃の記憶が蘇った。

——ばかばかしい。

懸命に自分に言い聞かせる。

「……枯れスキスキ……。考えすぎだ」

自立兵器に似た目を見ただけでもかかわらず、いまだに手が震えている。まさに蛇に睨まれたカエルだった。

男はドアから離れ、窓際のベッドに腰かけた。大きくため息をつき床を凝視する。ふと足元に置いてある拳銃のホルダーが目にとまった。体に染みついた癖で拳銃を取り出し、残弾をチェックする。ゼロ。自嘲的な笑みを浮かべてゆっくりと立ち上がり、男はベッドの隣にあるデスクに近づいた。弾の有無は生死を分ける。それは教官に叩き込まれた教えであり、厳格な事実だった。教会にまさかそんなものは無いと思いつつ、それでも引き出しの中から弾を探すことにする。開ける。

聖書、羽ペン、インクつぼ、洋服のボタン、判子、生糸、便箋、色褪せた用紙、懐中時計、錆びた鍵、ファイイル——

「ファイイル？」

すべてが時の洗礼を受けている引き出しの中であって、それは唯一劣化していなかった。触るとわかるが、腐食防止のコーティング加工がなされている。表紙には共通文字で『01』と書かれていた。好奇心とともに開いてみる。

『 報告書

型番・S072Y・I型。

限定試作型A1、Eシステム搭載。別紙参照。

改良型電脳、B・PAC2搭載。別紙参照。

改良型人工臓器、AIO・4搭載。別紙参照。

試作型フレーム、ALICE使用。

- ・長高一五〇cm ・重量七二kg ・タイプ・G
- ・表皮は耐水、耐衝撃性に優れるバイオカーボンを採用。

各受信器官については旧070シリーズを使用。

※ただし光学レンズは069型から流用。

テスト

拒否反応、作動不良ともになし。エモーションシステムにおいて、当初の予定スペックから若干の齟齬あり。これは仮想人格構築が自己学習機能に基づくためと考えられる。問題なし。

なおこれより三年間、S072Y・I型を実地テストに送る。

監督者として一名を派遣。場所は共和国領旧ルーマニア、トランスシルヴァニア地方。情勢不安定につき、留意されたし。

技術部』

恐怖の塊が足元から這い上がってくる感覚。

男は以前に地雷原のど真ん中を歩いていたことがある。仲間に大声で叫ばれるまでそのことに気付かず、言われても事態を瞬時に呑み込めなかった。その場に五分も突っ立ってようやく自分の置かれた立場を認識し、泣きながら助けを求めたのをよく覚えている。

いま自分の立っている場所が、わかってきたような気がした。

男は強張った顔でファイルをめくってゆく。最後のページには

ファイルと同じようにコーティングされた写真が挟んであった。

何かの記念に取ったようなスナップショット。ECCと縫い付け

られた汚い白衣を着こみ、四角い眼鏡をかけた若い男の隣にはにかみつつピースサインを出している小さな姿がある。

あの、少女だった。

男は写真を裏返し、それが撮られた日付を見た。五十三年前。

大戦がはじまる一年前だった。

可能性を瞬時に脳が否定するも、何かを押し戻す。

男はファイルに写真を戻して引き出しの奥に押し込んだ。落ち

着きなく部屋を見回し、ハンガーに掛けられた自分の迷彩服に気

づく。駆け寄り、ポケットを漁ると丸ミリが一つ出てきた。すぐ

さま装填し、安全装置を掛け、男は修道服のポケットに拳銃を突

つ込んだ。

——念のためだ、念のため。

深呼吸をして中庭に続く扉を開ける。外にはもうすぐ闇がやっ

てくるところだった。少女の待つ食堂へと一歩踏み出す。

——ただ、もしも彼女がロボットなら……。
男は拳銃に手を触れる。
背後で扉が大きな音を立てて閉まった。

▽
▽
▽

少女はノインと共に男が帰ってくるのを待っていた。シチューから出ていた湯気はとっくに消えている。

ノインは所在無く動き回っていた。そんな友の様子を見て、「大丈夫、もうすぐ来るよ……」

それはノインに向かって放ったものか、それとも自分に対するものなのか、少女自身にもわからなかった。待つことには慣れていた。

そのはずなのに、どうしようもなく苦しかった。窓の外にはもうすぐ闇がやってくる。

▼
▼
▼

男はドアを開け食堂に入る。同時に少女が立ち上がった。

「お帰りなさい。ありましたか？ あ、シチュー、いま温めますから待っていてください」

彼女はトコトコと厨房に向かう。途中で椅子に躓き、振り返って恥ずかしそうに笑う。その人聞かさい仕草を注意深く見ながら男は席に座った。胸をなでおろす。

——やはり彼女が機械のわけがない。コバルトブルーの目などどこにもあるさ。第一、そうなら俺を助けるはずがない。先ほどまでの高ぶった気持ちの嘘のように引いてゆく。少女に、それもシスターに銃を向けようとしたことが、ひどく醜く愚かに感じた。少女は時折厨房から顔を出した。それが男の中で妹の顔に重なる。

——帰ったらジュネに、この子のことを話してやろう。

しばらくして少女が厨房から鍋ごとシチューを持ってきた。湯気を立てるそれを鍋じきの上におろし、彼女はピンクのかわいらしいキッチンミトンを手から外した。

少女の右手首に、何かの模様がうつすらと浮き出ている。

S、
O、
7、
2、
Y。

凍りついた。

「はい、今度は温かいうちに食べてくださいね」

そう言って彼女はシチューを盛り付け、自分の席に着いた。

男は反射的にテーブルの下で拳銃に手をかけた。距離はほぼゼロ。外すわけのない状況だった。

銃は、抜かれない。

何か得体の知れない力が男の手をポケットに縫いつけていた。だが沸きあがってきた黒い感情は、男の中で弾丸へと変わる。そ

れは怒りか、あるいは信じたものが敵だったという失望かもしれなかった。少女は「心配そうに」男を覗き込んでくる。

「あの……大丈夫ですか。どこか具合が悪いのなら――」

激鉄が落ちた。

「どうして、俺を助けた」

一度引かれたトリガーは戻らない。男の意図しないところで力が突き進む。理性を完全に無視し、それは口から迸った。

「お前はロボットだろ……人間をムシ同然に捻り潰す機械だろ」

自分は少女に向かって何を言っているだろうか、と思う。

だが、止まらない。激情に抗えない。

男は少女を見据える。

「お前らはどれだけ殺せば気が済むんだ。このまえも仲間が殺された。埋葬すらできねえ！ 全部お前らのせいだ！」

男には分かっていた。彼らをつくり出したのは人間であること。

彼らに人殺しをさせたのは、他ならぬ人であることを。

「敵に助けられるなんてな、お笑いだ。俺を飢えさせ、かと思えば食べものを与えて……そんなに人間を弄びたいか」

そんなことを告げたいのではないのに。本当に言いたい言葉は怒りの鎖に繋がれて、胸の奥深くに押し込まれていた。

「ロボットに……助けられるなんて……」

悲痛なつぶやき。忌んでいたものに救われ、挙句に家族の姿まで重ねていた。そんな自分が憎い。男の顔に薄笑いが浮かぶ。

「こんなことなら……あそこで死んだ方がよかった」

永い、間。

「――何で」

男の尋常でない視線を真っ向から受けてなお、少女は怯まなかった。セラミックのテーブルを思い切り叩き、

「なんでそんなこと言うんですか！」

男の方こそ怯んだ。犬はテーブルの下に隠れ、少女の首から下がった十字架が男の眼前で跳ねた。

「確かに私は機械です。そのことで何と罵られても一向に構いません。でも、でもどうして死ねばよかったなんて言うんですか。

あなたの無事を祈って待つてる人のことを、少しでも考えたことがあるんですか！」

鉄火場のようになった脳裏にジュネの顔が浮かぶ。それと同時に男は我に返った。改めて目の前の光景にぎよつとする。

少女は泣いていた。

「……私たちも、ここで人を待っているんです……」

彼女の頬を伝うのは、ひとすじのレンズ洗浄液。

「約束したんです……だから、待ちます。あの人が帰って来た時に『お帰りなさい』を言えるように……」

そう言って少女は俯いてしまった。男は途方に暮れる。

唐突に、ファイルに記載されていた『システム』を思い出した。自立兵器が持っているのと同じような感情のプログラム。彼女はそれに従っているだけだ。その根源にあるのは、0と1の生み出した虚構に過ぎない。彼女の感情だって――

——ちがう。

彼女の「涙」は、プログラムの一言で片づけてしまえる軽々しいものではなかった。少女は自立兵器のような化け物ではない。それどころかコロニーに住むニンゲンよりもずっと……。

男はそう、信じた。

窓を見やる。最後の残光が遠い空を赤く染めあげていた。

「悪かった……」

男は拳銃から手を放す。俯く彼女の頭に手を伸ばし、一瞬躊躇するも、ジュネにそうするようにそっと手を置いた。少女が顔をあげると、男は目の前にあったシチューを食べ始めた。あつという間に平らげ、空き皿を少女に差し出す。慣れない笑顔と一緒に。

「……もう一杯、くれないか？」

少女は目じりを軽くぬぐい、きれいに笑った。

「はいっ」

再び彼は盛られたシチューを食べた。若干冷めてしまっただけだが、十分だった。犬もテーブルの下から出てきた。

気まずい雰囲気打ち消すように二人は会話を弾ませた。男の故郷の事、家族の事、少女の生活の事、ノインの事。

男が何回目かのおかわりをしようと手を伸ばしたとき、

「うれしいです。おかわりしてくれる人がいるのは」

男は手を止める。

少女は犬の頭をなでていた。しかしその視線は犬を見ておらず、ここではないどこか遠いところを見ているようだった。

「人が来ないんです、ここには。ノインはいてくれるけど……で

もやっぱり少し、ほんの少しだけ心細い——」

そこまで話したところで彼女は帰ってきた。視線を男に戻し、まるで自分のことばを掻き消すかのように手をパタパタと振った。

「何を言っているんでしょうね、私。さあ、もつと食べてください。いっぱい作ったんですから。ノイン、ニンジンも食べなさい」

男は町の様子を思い出したが何も言わないことにした。少女の泣きそうな笑顔が、少し悲しかった。

深夜。

男は客間にいた。だが眠ってはいない。ベッドに腰掛けて手を組み、気味が悪いほど明るい月明かりの下、何かを考えていた。

『あの……もしよろしければ、もう一日泊っていきませんか？』

夕食を食べ終えた後の談話中、少女が男にした提案だった。

——それも、いいかもな。

家にはジュネが待っている。ずっとここにいるわけにはいかな
いが、せめて一日くらいは、

ザッ……

突然、壊れたと思っていた通信機からノイズが走った。男は慌ててチューニングを操作し、暴れ回る雑音を抑える。一方的な通信。器機を耳に近付け注意深く聞く。

『第三中隊よりB4へ。明日早朝、救助に向かう。そちらの通

信機からの電波をたどる。そこを動かぬ』

襲撃から生き残っていたと思われる、他の隊からの通信だった。男は諸手を挙げてベッドに倒れ込む。明日になれば救助がここに、ここに。

コロニーのニンゲンは男がそうだったように、常に困窮し飢えに苦しんでいる。果たしてそんなニンゲンたちがこの豊かな教会に来たら、少女たちの穏やかな生活はどうなるのだろうか。

考えずとも分かった。今なら祈ってもいい、そんな気がした。

——少女の日々が、彼女が交わした「約束」が守られますよう。

何も言わずにベッドから起き上がる。今から出発し、自立兵器に出くわさなければ、明日の朝には森を超えられるはずだった。

森を抜ければ、少なくとも森に入ればこの教会まで部隊は来ない。

男は迷彩服に着替え、修道服をたたくでベッドの上に置く。先

ほど貰っておいした食料を詰め、無線機をしまい、

何やらもこもこした物が手にあたった。

テディベアだった。

苦笑する。おそらく町で最初に入った家にあつたものだ。いくら意識が朦朧としていたとはいえ、こんなものを持つてくるとは。

——そうだ。

彼はテディベアを片手に部屋から出る。中庭は昼間とは別の世界だった。廊下に四角く切り取られた夜空の下で、噴水から流れ落ちる水の音だけが寝静まった花壇を駆け回っている。ブルーローズも花弁を閉じ、まるで眠っているようだった。

庭を抜け、少女の寝室に入る。

床には犬が丸まっており、ベッドでは月光に包まれた少女が、無垢そのものといった表情で眠っていた。ロボットであるというのに律儀にパジャマに着替えているのが男の笑いを誘う。彼は枕元にテディベアを置き、そつと部屋から出ようとした。

金の十字架。

彼女がいつもしている、現に寝ている今でもつけているその裏に、何やら小さく文字が彫つてあることに気がついた。彼女を起さないように注意しながら、胸の上のそれをそつと持ち上げ、月明かりに照らしてみる。

男は眠る少女に向かつて囁いた。

「ロボットは憎い、憎くてたまらない。だけどあんたは、あいつらとは違うようだ。……またいつか会おう、約束だ」

足音。そして扉の閉まる音。

▽
▽
▽

窓から差し込む朝日に顔を照らされ、彼女はむくりと起き上がった。隣の床ではいつもどおりノインが丸くなっている。ベッドから身を乗り出し、頭をわしわしとなでた。

「おはよ、ノイン」

彼女はパジャマからいつもの修道服に着替えた。顔を洗い、髪をとかして、客人を起こしに朝日に照らされた廊下を歩いていく。

ドアを開けた。誰もいなかった。

「あれ——」

昨日ハンガーに掛けておいた迷彩服がなくなっており、窓際のベッドはきれいに整えられている。毛布の上には修道服がたたまれて置いてあり、その隣には、

「クマ……」

両手に乗るくらい大きさの、古ぼけたテディベアがいた。何かを持っていて。あの誕生会の写真と、一通の手紙だった。

『 ローザへ

おはよう。きつと俺がいなくてびっくりしたことだろうと思う。夜中に急用が入って出かけることになってしまった。せつかく誘ってもらったのに、黙って出て行ったことを許してほしい。ついに最後まで言えず仕舞いだったことばを、せめて手紙で伝えようと思う。

ありがとう。

P・S

このテディベアは俺からの贈り物だ。受け取ってほしい。

君は、ひとりじゃない。

J・E 』

少女は手紙を読み終え息をついた。隣ではノインがしきりにテディベアの匂いを嗅いでいた。

——ひとりじゃない、か……。

彼女は傍らの写真を手にとり、そっと抱き締めた。手紙をきれいにたたんで封筒に入れなおす。封筒はかなり古いもので、おそらくその引き出しにあったものだった。

しかし、

「どうして私の名前を知っていたんだろう」

ローザ。

それは遠い昔に呼ばれた名前だった。呼ぶものがいなくなってきた。テディベアを鼻でつつき、ノインが小さく鳴く。

「うん、大事にしまっておこうね」

テディベアを自分の部屋の棚に飾る。もちろん手紙も一緒に。

「ノイン、朝ごはんにしようか」

ノインは大きく吠え食堂にむかって走っていった。

ローザもあとを追う。首に掛った十字架が揺れ、裏に彫ってある文字がちらと見える。

『 ローザへ いつでもきみの傍に 技術部一同 』

天気はすこぶる快晴。

夏を控えた陽光が町を照らし、爽やかな風が森の彼方まで鐘の音を運ぶ。教会の中庭では色鮮やかな花々が咲き乱れ、噴水の飛沫を受けた青いバラが、ふわり、揺れた。

〈了〉